

## ポアとは何か！

—インド・チベット密教ヨーガの一考察—

金本拓士

生れ生れ生れ生まれて、生の始めに暗く、死に死に死に死んで死の終りに冥し。

弘法大師『秘蔵宝鑰』

人間はどこから生まれ、死んでどこに行ってしまうのであろうか。

宗教は常にこの問題を解決するために存在してきたと言っても過言ではない。

平成七年は、宗教界において、非常に重要な年となった。それは言うまでもなく、オウム真理教事件が起ったことであり、その事件によって、それまでまったく宗教に対して興味を示さなかった一般の人たちがいつせいに、居酒屋でくだを巻くおじさんたちに至るまで、あれやこれやと宗教を論じはじめたからである。そして、そこで語られてくるものは、やはり宗教というものはいかがわしい存在であるという、短絡的な結論に収斂していくような感じである。

しかし、これだけオウム真理教事件を契機として宗教問題に関心を示しているにもかかわらず、既成仏教教団は、

ポアとは何か！

自宗の正当性のみを主張し、その宗団の根幹にある宗教性について、深く反省を試みようとするものもない。

確かに宗教というものは、一般の社会通念からするならば、いかがわしい存在にうつるかもしれない。しかし、そのいかがわしさがあればこそ、常に閉息状態に陥りやすい社会、あるいはその文化に安住する人々に対して、ある種の生の活力を与えうる存在ともなり得るのである。この活力を与えるエネルギーがあるからこそ、そこに人々への救済力が生まれ、また救いの対象ともなる。だが、逆に考えるならば、宗教という文化の周辺からもたらされる力は、それまで作られ、維持されてきた社会生活を脅かす力ともなり得るのである。

しかし、宗教にその表と裏の顔があるのだから、オウム真理教も事件を起こすのはしかたがないのだ、といつて許される問題ではない。オウム真理教が殺人を起こしていく過程には、文化の周辺にあつておさまるべき集団が、文化の中心に対して、ある種のルサンチマンを抱き、その文化の中心的存在になろうとしたことに大きな過ちを犯す結果となつたのではなからうか。すなわち、かれらは、常に世俗の社会を虚構の世界と位置づけ、その世界からの脱出にこそ、人類の救済があるとする。しかし、その宗教の権威付けのために、社会において宗教的権威が認められている宗教者を利用したり、純粹な出家生活を信者に強要しながらも、衆議院選挙に立候補するのも、周辺にあるべき宗教の立場とは逆に、文化の中心に自らの立場を置こうとする、その矛盾した二面性もついている証ではなからうか。そして、その宗団の矛盾した二面性を解消するために、表では、戒律を重視した原始仏教を標榜し、裏ではヴァジュラヤーナの立場をとる。つまり、文化の周辺にいるときは、原始仏教。文化の中心に向かうときはヴァジュラヤーナの教義を主張していったようにも考えられる。

それでは、オウム真理教が言うところの原始仏教とヴァジュラヤーナとは何か。原始仏教の方については、これまでに大学の仏教学者によって著された仏教概論で解説されているものと、それほど教団が言っているものと相違はな

い。しかし、裏の顔であるヴァジュラヤーナについては、一般的に非常に分かりづらい問題である。何故なら、我々真言宗も、言うならばヴァジュラヤーナ（金剛乘）であるが、かれらの言うヴァジュラヤーナの教義は主にチベット密教から借りてきているものであり、そのチベット密教教理についてはあまり一般的に知られていないからである。そして、オウム真理教事件においてなじみになった、チベット密教で使われる術語で、教祖が人を殺すことを弟子に命じるときに使用する「ポア」がある。この「ポア」という言葉は、それまでまったくチベット語を知らない普通人まで「殺人」という意味で浸透していった。

後で見ると、決して「ポア」という言葉に「殺人」という意味はなく、チベット密教における修行においては非常に重要なタームとして使われるものである。

本論は、この「ポア」という言葉が本来どのような意味を持っているのかを考察することによって、正しい意味を理解し、そこからチベット密教の性格を考えるものである。

「ポア」という言葉の意味について

はじめに「ポア」と言う言葉に、果たして「殺人」の意味があるのかどうかを、辞書から調べてみることにする。もっとも一般的に使われているイエシケのチベット語辞書を開いて見るならば、主な意味として、以下の三通りが出てくる。

- ①to change place,shift,migrate
- ②to change
- ③to die

この中で問題とされるのは三番目の意味であろう。また、この項目に続いて、標記される用例に「初期の文献でもっとも一般的な表現である」と付記された上で加え、具体的な使用例として、

[chi zhiŋ 'pho ba chi 'pho ba 'debs pa, (逐語訳するならば、「死んで移る。」「死んで転移に入る」となるが、いずれも「死ぬ」と訳してさしつかえない。)]

を掲げ、さらに『死者の書』を引いて、

[to help soul to a happy departure] 「幸福の領域へと魂を救済する」

と言う意味を出している。

以上のことから、「ポア」という言葉には、「殺人」の意味は含まれていない。しかし、ここで注意しなければならぬのは、第三番目の意味の「死ぬ」という意味であり、さらにそこで引用されている『死者の書』にある「魂を救済する」ことであろう。

この『死者の書』については、教化資料で簡単に概説しているので参照していただきたいが、森雅秀氏が次のように簡潔にまとめている。

「チベット死者の書」とは、生前にポアの行法をなしえなかった死者のために、すぐれたグルが、この「チベット死者の書」を読み聞かして、バルドの期間を経ないで解脱することが可能である。かつて実修した行法の記憶を、臨終に際してよびおこすことよって、自ら解脱することができからである。この行法は「転移」(ポア)と呼ばれる。したがって「バルト・トドル」は転移による解脱ができない人のために誦誦される。転移とは人間の身体をつらぬく神経の脈管と、その中を流れる「生命の風」(ルン)を支配して、最終的には、頭頂にある「梵孔」

と呼ばれる穴から生命の風を放出する行法である。

以上のことを踏まえるならば、オウム真理教事件で教祖が殺人を命令するとき発したとされる言葉「ポア」には、決して「殺人」という意味はない。本来ならば、「魂を救済しなさい」となるであろうが、結局、オウム真理教においては、組織にとって都合の悪い人間を殺害する（何故なら、教団に害ある人間とは、即ち悪趣に陥る魂なのであるから）ために、教祖はここで「ポア」という言葉を使ったのである。しかし、『死者の書』を読めば明らかであるが、あくまでも「ポア」とは、現在生きている人間を殺して魂を救済するのではなく、チベット密教におけるヨーガの行法であるとともに、臨終を迎えた人間の魂が死んで次の世界へ輪廻をしようとする、まさにその時に魂を救うヨーガの技法なのである。

以上のようにチベット語で「ポア」の言葉そのものの意味を見てみた。では、チベット人が「ポア」と訳したインド密教のサンスクリット語は一体、何であったのであろうか。この点をはっきり原典から遡って見てみるならば、その言葉の意味することがもう少し明確になるであろう。

さて、その点について、智山派から出版されたオウム真理教事件に関する小冊子の中で、チベット語で「ポア」と訳されたサンスクリット語を「*cyavana*・*cyavana*・*cyuti*」としている。<sup>2</sup>確かに蔵梵辞典によれば、その言葉の用例が出てくるが、その出典例を見ると、ほとんどが『十地経』から取られた単語である。そして、それは次のように使用されている。

すなわち、あらゆる仏が出生されるところ、（そこに）あらゆるすべての世界へ進み行くととき、初めに兜率天に住

し、(そこから) 落ち行きて (下生) [cyavanaṅ cankramana : 'pho ba dang gshogs pa] 托胎し、出生、子供として戯れ、奥宮廷に住し、出家し、苦行し、菩提道場へ近じき、…… (近藤本、19頁)

(第三地の菩薩である) わたしは、(様々な過去を記憶しているため) 彼処から没して、そこに生まれ、そこに没して [tatas cyuto : de nas shi 'pho nas] 'ここに生まれる。(近藤本、58頁)

そのほかにくつつかの用例が見いだせるが、ここに掲げる二点に集約される。

まず、初めの用例では、釈迦が兜卒天からこの世に降臨される状況の場合に使われ、第二の用例では、菩薩が何回も輪廻して生まれ変わる際に使用されている。

第二の用例からするならば確かに「cyuti」を「死ぬ」という意味に取って、「pho ba」もその意味で解釈することもできるが、ただし、その場合、チベット語の訳し方は「shi 'ph ba」と、「死んで移りゆく」と訳し、「pho ba」そのものに「死ぬ」という意味を含めていない。つまり「pho ba」という言葉そのものは、「ある場所からある場所へと移動する」という意味あいが使われているのであり、その派生的な意味として「死ぬ」という言葉が付加されていったと見るべきであろう。よって、上記のような「死者の書」等で使われる「ポア」の原語としては相応しくなく、いようである。

それでは、「ポア」の原語が何かというならば、やはり蔵梵辞典に掲げられているところの samkrama samkranti (samv'kram) が適切であろう。

後期インド密教研究の権威者である津田真一博士が著書『反密教学』で次のように述べている箇所がある。

「ポア」っていうのは *pho ba* だったんですね。このサンスクリット原語は *saṅkramaṇa* で、これはタントラ仏教を一貫した基本的な行法です。〔『反密教学』19頁〕

このように、「ポア」の原語を確定して、続けてインド密教における *saṅkraman* の意味を説明する。

*saṅkramaṇa* は「菩提心の」転移」という意味でして、この語の本来のイメージは、何か規整された経路の中を、順を踏んで移動する、というものです。〔『反密教学』同頁〕

津田博士はここで言及している「ポア」は、中沢新一氏の著作に書かれているものであり、それは本稿にて考察する「ポア」について説明している。そして、その「ポア」とは、「タントラ仏教を一貫した基本的な行法」であり、そのサンスクリットを *saṅkramaṇa* であるとする。さらにその言葉は「菩提心の」転移」という意味であり、「何か規整された経路の中を、順に踏んで移動すること」が本来的なイメージであるとする。

この本来のイメージについて、例えば *saṅkramaṇa* をモニエルの梵英辞典を引いてみるならば、[*the sun's passage from one sign of the zodiac to another*]「太陽の黄道帯のある宮から他（の宮）への通過」という天文学用語から何え、それは規則正しい道筋（この場合黄道帯）を移動するイメージと一致する。

それでは、「ポア」がサンスクリット語の *saṅkramaṇa* (*saṅkram*) の訳語と確定されたとして、それが津田博士が言うような「タントラ仏教を一貫した基本的な行法」とどう結びついてくるのであろうか。そして「ポア」が何故魂の救済と結びつくのか。その点を明確にしなければならぬだろう。

ポアとは何か！

そこで、津田博士の論文から、氏がいう「菩提心」の「転移」に関するところを少々長いが引用し、そこから「ポア」について考えてみることにする。

即ち、瑜伽者の頭・喉・心臓及び臍に大楽論・受用論・法輪及び変化論の四輪が想定されるのであるが、それらは順次、三十二、十六、八及び六十四弁の蓮華であり、それらの中央に、種子 Ham Om Hum 及び Anj が存在する。……この四輪を上下に中脈 Avadhūti が貫き、この Avadhūti の中を菩提心が転移する。その過程全体が第十八偈にいう saṅkrānti であるはずである。しかし実際には、この菩提心の流れそのもの (saṅkrānti) と Avadhūti は不可分であり、同一である。Avadhūti は madasthāna より kandasthāna に到る。この二点と Lalana と Rasana は合流している。

瑜伽によって臍輪の Candali の火が燃やされ、Avadhūti を通って上に燃え上るのであるが、これは kanda に於て「般若を自性とする」Lalana と方便を自性とする Rasana が合流して、菩提心が生ずるのであるから、この菩提心の上昇する過程を示すものと理解し得る。なお、タントラの文脈に於て、この菩提心が、性的実践による男女両性の精液、即ち sukra と rakta の混合物という面を有することは言をまたない。

この菩提心が Avadhūti 中を上昇して、madasthāna に到ったとき、菩提が実現する。madasthāna が「菩提道場を自性とする」のは、この故である。そこに於て菩提心は「種子」の状態にある。【四輪三脈の身体観】303—304 頁

ここで言われるように、瑜伽行者は、身体中に四つの輪（インドヨーガでチャクラと言われているもの）を想定す



る。またその中心を貫く脈管 Avadhūti があり、その中を菩提心が転移するのである（ただし、その菩提心は未顕現である）。その転移の過程を sankramaṇa'（つまりチベット語で「pho ba」と訳するものである。また、以下のよう（未顕現の）菩提心の転移の過程と月の移動と重ねて説かれるように、その転移は「規整された経路の中を、順を踏んで」移動し、最後にその菩提心は顕現された菩提心として完成するのである。

まさに同様に、黒月の第一日より始めて上弦の第一日にいたるまで、転移があるべし。左に月であり、☾であり、微組の自性あるものである。右に日あり、☀であり、鹿大の自性であるものである（三五）。

菩提心の自性の差別によって〈転移〉は十六（部分）よりなり、半更（ごと）の経過の差別によって〈転移〉は十六（部分）よりなると考えられる（三六）。

よって〈転移〉は十六（部分）よりなると考えられる（三六）。

月触は標点 (asusvara) の滅であり、日触は虚空 (visarga の記号) の滅である。これらをそなえた〈転移〉の過程は十六（部分よりなるもの）なりと知られる、（三七）。

無分別の大安楽は智慧のすがたある欲求である。此は歓喜であり、楽の家（に入る）門であり、敷居に譬えられる（三八）。（四輪三脈の身体観30頁）

このように、この顕現された菩提心の獲得こそタントラ密教の行者のヨーガの目的とするところのものであり、それが津田博士の言われる「タントラ仏教を一貫した基本的な行法」であるとするならば、上記の『死者の書』で説かれているヨーガの技法もその線上にあることとなるであろう。実際、『死者の書』の根拠となるヨーガの技法と見な

される「ナーローの六法」の最初に説かれるヨーガの段階は、身体中の火を燃え上がらせる「トゥンモ」という技法であり、ここでは、先述の「Candali」の火<sup>2</sup>が表現されている。そして、オウム真理教が使用する「ポア」という用語こそは、この「ナーローの六法」から由来するものであり、このヨーガの技法を見ることで「ポア」の意味もはっきりさせることができよう。

ナーローの六法とは

「ナーローの六法」とは何か。その内容を概略してみることにする。

この「ナーローの六法」は「ナーローバの六法」とも言われる。ナーローバは、ナーランダー学問寺の学頭でありながら、その地位を捨てて、密教行者ティローバ（伝説では漁師であったとされる）につきタントラ密教の瞑想法（この六法もかれから伝授されたといわれる）を学び、さらにチベット密教の流派のうちでカギユ派、特にタクポ・カギユ派の祖であるマルバの師匠でもある。そのナーローバによって編成された修行法が「ナーローの六法」と言われるのである。ナーローバ、ならびにカギユ派については、ここでは述べないが、以下、「ナーローの六法」の概要をエヴァンス・ヴェンツと立川武蔵氏の著作に基づいてみてみることにする。<sup>3</sup>

さて、六法とは、内的火、幻身、夢、光明、中有、そして最後にポア（転移、遷有と訳される）があって、これらのヨーガの修行法を合わせた名称である。それぞれ単独に修されることもあるが、この六法の最初から最後までを一連の修行体系と考えて良い。そのことは、ツォンカバも「トゥンモの修行が特に転移を成就する原因の一つである。」と、最終的にポアを修行する場合、その前段階としてトゥンモ等を修する必要性を説いている。以下、それぞれの修行法を列挙してみる。

1、内的火 これは、チャンドラー [Candali] の火、あるいはチベット語によってトゥンモ [gum mo] とも言われる。ヴェンツは、内的火について、「このトゥンモという言葉は、自然の中の無尽蔵にあるプラーナ [prāna] の貯蔵処からプラーナを抽出する方法に関するものである。また、人体の活力源であるそのプラーナを蓄え、次にそのプラーナを使用して、精子を微細な熱エネルギー変換する。従って、精神的に肉体中におこる炎は内面的に生産され、精神の神経システムである神経叢に通じて循環せしむる。」と説明する。これはインドのヨーガ、特にタントラヨーガの流れにある修行法によるものである。

ヨーガの理論から言えば、人間の身体には三本の中心的な脈管が性器から頭頂へと貫かれ、そこから枝分かれした七万二千もの脈管が縦横無尽に張り巡らされている。さらに三本の脈管にはいくつかの神経叢（チャクラ）が配置されている。

この内的火、トゥンモの修行法によって、脈管の基底部にあるチャンドラーと呼ばれる性的エネルギーを清浄なエネルギーに変換して、脈管を上昇させることによって、菩提心を覚醒させるのである。

2、幻身 幻身とは、インド思想におけるマヤーの教義に基づくものである。マヤーとは、我々が住むこの現象世界は、夢・幻のように実在するものではないとする。しかしながら、世界は全く虚無なる存在ではなく、インド哲学においては、その背後に世界の創造者としてのブラフマンの存在を想定し、仏教においては、その根拠を唯識では阿頼耶識に求める。そして、ヴェンツの言い方を借りるならば、「マヤーは魔法の被いである。自然さえも被われ、グレートマザーであるイシスであり、真実を被うもの」[WENTS1977, p164] であるとされる。ここでマヤーがグレートマザーであるとするのは、マヤーが単なる幻ではなく、それが、世界を創造し、破壊をも支配する大いなる母性とみなす。そしてマヤーという言葉の「マール：ma」とは「量る」という意味の語根である。それは世界

を量ること、つまりある一定の分量に測り分節することを意味する。我々はその量られた世界を量られたものと欺かれ、その現象世界を生きているのである。幻身とは、この欺かれた世界の真実から目覚めるための修行法なのである。

3、夢 この段階の修行は、先の幻身をさらに深めたものである。あるいは、マザーの教義が、我々が見る現象世界の本質を明らかにするためのものであるとするならば、この「夢」の段階は、我々自身の意識が、たとえそれが睡眠から目覚めているといえども、真実はまだ夢の中にいることを悟るためにある。ヴェンツは、「ブラフマンが眠り、そして目覚めること、彼が夢見るとき、かれの夢は宇宙創造。かれが目覚めるとき、かれの夢はおしまいとなる。かれの夢の状態は輪廻であり、その目覚めた状態は、涅槃である。心のすべての中に、創造と非創造、輪廻と涅槃、そして起源がある。すべての中の心に、両者のすぐれた理解力が、その一瞬の中にある。」と説明するように、我々の世界がまさにブラフマンの眠りの中にあることを知ることこそがブラフマンの眠りを醒ますことにはかならない。

4、光明 この光明は、我々の肉眼で感じる光や夢の中で見る光ではなく、「内的火」、「幻身」、「夢」の修行でもって獲得しようとするものである。つまりその光明は意識以前に存在する原初の光である。ヴェンツはこの光明について「暗闇の中で輝ける光は生じた。それらは太陽の光の暖かみと輝きから由来され、太陽の光から月の光がもたらされ、月から清冷さが獲得され、そこからすべてを見渡す叡智がもたらされる。そこで、根本空があり、自然の現象物が照らし出され、世界全体のシステムが明らかにされるのである。」[WENTS, 1977, p167]と述べているように、この光明とは、旧約聖書の冒頭にある、神の言葉「光あれ」と比すべき光ではなからうか。そして、「六法」では、この光明は次のステップである「中有」において見られるものである。

5、中有 中有とは、言うまでもなく死から四十九日間、魂が肉体を持たずにさ迷える状態をさす。中有の修行とは、ヨーガ行者が三昧に入り、生きながら仮死状態に入って中有を体験するものである。『チベット死者の書』はこのヨーガを基本にして作られたものであり、そこで記述されているような、中有を体験することによって、前の『光明』のヨーガによって見られた意識以前の光明をより確実に認識する。

6、転移(ボア) 最後の修行法である転移(あるいは遷有とも訳される)は、意図的に自己の意識あるいは他者の意識を移し替える技法である。また、ボア・トンジュクという言い方もあり、この場合、ボアの技法とトンジュクの技法を合わせて称せられる。そして、トンジュクとはボワによって引き抜かれた魂を人間の死体ないしは動物の身体に移し替える技法というのが、一般的には区別されて使用されているようである。

さて、他者の魂を移し替える技法は、『死者の書』に見られるような、死にゆく魂が六道輪廻の悪趣へ赴かないように導く技法であるとされる。しかし、このボアの修行は、基本的にはヨーガ行者自身が解脱するための技法であり、他者の魂を救済できるのは、あくまでもボアの技法をマスターしたグルのみである。このことは、ツォンカバ自身も次のように言っていることから伺えよう。

金剛ダーキニーより、「場所の辺際こそ清めるべし。清めてから生命の転移をなすが、他においては、意味がないだろう。」と、安楽と苦痛の場所が身体の辺際であり、前のトゥンモを修行することによっても、清められず、転移を為すならば、安息の意義が無いと、パーヴァパドラによって解釈されるので、先述のトゥンモの修行が特に転移を成就する原因の一つである。<sup>4</sup>

かれは、ボアを成就するためには、最初の修行であるトゥンモを成就しなければならぬとする。すなわち、六法の最後の修行であるボアの完成のためには、それまでの修行を完成する必要を説くのである。また、「ボア」を成就することによって

この道の功德こそ、『金剛ダーキニー』より「日夜聖者を殺し、また五無間（罪）を為し、盗みを働こうと思つて行つても、この道によって清浄になり、罪によつても身にまとうこともなくて、生命の低き（場所）から遠く離れる。<sup>5</sup>

と、仏教における最も重い五逆罪を犯したとしても、その罪を離れ悪趣に赴くことがないと、絶大な功德な説く。では、実際にどのような技法を行うかは、ここで詳しく記載する紙数がないため、省略するが、基本的には津田氏が説明するように、身体を中心に貫く四輪三脈のヨーガを行うことによつて、菩提心を覚醒することを目指す。そして、最後に

三摩地の力によつて（頭頂）以外の八つの門から意識が転移することを塞ぐことができ、黄金の門から転移することが必要である。<sup>6</sup>

と、ツォンカバが言うように、身体にある九つの穴のうち、頭頂（黄金の門）から意識の主体（これを菩提心とタントラではない）を抜き出すことが成就の証となるのである。

以上のように、「ボア」と言う言葉には決して「殺害」の意味はまったくなくない。そして「ボア」が意味することをまとめるならば、

1、本来的な語義としては、ある場所からほかの場所に移動すること。  
2、問題となる「ポア」のサン스크リット語は *san- $\sqrt$ krān* であり、それは太陽が黄道を巡行するように、ある規定された道筋を順に移り行くことを示す。

3、タントラ密教において、「ポア」とはヨーガの行法で身体中の四輪三脈内を菩提心を巡行させることを示す。

4、「ナーローパの六法」に見られるように、3のヨーガを為すことによって、最終的には、意識の主体となる菩提心を頭頂から抜き出し、輪廻から超越する行法そのものの名前をさす。

これら4点となり、「ポア」とはあくまでもタントラ密教におけるヨーガの体系の中の特殊な行法であって、それは他者の魂を奪う意味はまったく存在しない。しかしながら、決してチベット密教の中に殺害をなす呪法が存在しないわけではない。人の魂を奪う修法としては、ここではあげなかったが「トンジュク」というものがある。カギユ派の開祖であるマルパの息子は、その法に優れたために逆にその修法によって殺害されたという伝説も残っている。そして、その密教の危険性は何もチベット密教に限らない。それは日本においても、中世に何度も殺害のために調伏護摩が修されてきたように、密教そのものの中にはそのような危険な側面も合せもっている。

我々はいまにも、合理的な思想によって、仏教あるいは密教を割り切って考えようとしている。しかし、今まで無視しつづけてきた非合理的な側面に光をあてないかぎり、本当の意味での密教は理解できないであろうし、それを考究しないかぎり、オウム真理教事件の真相も見いだし得ないのではなからうか。

#### 参考文献

近藤隆昇『梵文大方廣佛華嚴經十地品』大乘佛教教會昭和十

一年

西藏大藏經北京版No. 6202 Zab lam na-ro'i chos drug

gi sgo nas 'khrid pa'irimpa "yid-chos gsum ldan" 『密教道ナーローの六法を従って教導する次第』三書具足、[yid-chos gsum ldan]

SIR MONIER-WILLIAMS SANSKRIT-ENGLISH DICTIONARY, OXFORD, 1974

H. A. JASCHKE A TIBETAN-ENGLISH DICTIONARY, MOTILAL BANARSIDASS, 1975

津田真一『反密教学』株式会社リッロー 一九八七年九月十日

【田輪三脈の身体観】

1 森雅秀『「キムット死者の書」とは何か』ユリホカ十二月臨時増刊一九九四年十二月

2 『オウム真理教事件と我々の課題』22頁

3 W. Y. EVANS-WENTS "TIBETAN YOGA AND SECRET DOCTORINES" OXFORD UNIVERSITY PRESS 1977 [WENTS 1977]

立川武蔵『西藏仏教宗義研究 第五卷「ツツカン」一切宗義カキユ派の章』東洋文庫 昭和六十二年三月二十五日

4 rdo rje mkha'i gro las/gnas kyi mkha'i ni dag par bya//dag nas srid pa 'pho bya yis//gzhan du na ni don med 'gyur//zhes bde sdug gi gnas lus kyi mkha 'ste/sngar glum mo bsgom pas dag par ma byas par 'phos na/ngal ba don med du bha ba bhadrās bshad pas/sngar gyi gtum mo sgom pa 'pho ba khyad par can sgrub pa'i rgyu cig yin no//(tsha 131a8-131b2)

5 Lam 'di'i phan yon ni rdo rje mkha' gro las/nyin re bram ze gsod pa dang//mtshams med lnga ni byed pa dang//'ku 'phrog 'dod la spyod pa yang//lam 'di yis ni dag 'gyur te//sdiig pas gos par mi 'gyur zhing //srid pa'i skyon las ring du 'gro//zhes gsungs te/(tsha130b5-6)

6 de la thun mong ma yin pa'i tingnge 'dzin gyi stobs kyi sgo gzhan bryad nas nam shes'pho ba gog nus shing/gser gyi sgo nas pho nus pa cig dgos so (taha 132b6-7)